大槻玄沢・志村弘強編『環海異聞』本文確定の基礎的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16426

明治大学人文科学研究所紀要　第七十二冊（二〇一三年三月三十一日）縦　八十一―一〇二頁

大槻玄沢・志村弘強編『環海異聞』本文確定の基礎的研究

岩井憲幸

—— *Abstract* ——

A Study Regarding the Text of Ōtsuki Gentaku and Shimura Kōkyō's *Kankai-ibun*, 1807

IWAI Noriyuki

The purpose of this paper is to propose a currently available way to obtain the best text of *Kankai-ibun*, the original manuscript of which has been lost. *Kankai-ibun* is a full report on the experiences of 16 sailors of the Sendai Clan over the years 1793-1803, during which time they were cast adrift, landed in Russian territory, remained there for some time, and finally returned to Japan via both the Atlantic and Pacific Oceans. Four of the men were returned to Japan by Nikoraj Rezanov, the second envoy to Japan from Russia, after Adam Laksman. They traveled on a ship under the command of Ivan Fyodorovich Kruzenshtern, the commander of a Russian fleet that was attempting the first Russian circumnavigation of the globe. It would be the first circumnavigation, as well, for any Japanese. After reaching Japan and having been refused in his bid for trade negotiations, Rezanov handed over the four Japanese sailors to the authorities, and in 1805, he left Japan.

In Edo, end in December, 1803, the sailors were interrogated for more than 40 days by Ōtsuki Gentaku, a court physician of the Sendai Clan and a famous *rangakusha* (a scholar undertaking the study of Western sciences by means of the Dutch language), as well as by Shimura Kōkyō, a Confucian scholar, also of the Sendai Clan. In February, 1804, Gentaku and Kōkyō produced a rough-draft report, but Gentaku was unsatisfied with it, and it was not until May, 1807, that a full report, the product of continued investigations and repeated rewritings, was completed and presented to the Clan. It was entitled *Kankai-ibun*, consisted of 16 volumes, and reportedly contained 115 beautiful illustrations. Unfortunately, this original manuscript was later lost.

There are over 50 manuscript copies in existence today. *Kankai-ibun* texts have been printed several times since the Meiji period, but the authenticity of their sources is in doubt. From among a number of well-preserved manuscripts, I have selected three for particular study: one owned by the Miyagi Prefectural Library (=*D*), one owned by the Ichinoseki City Museum (=*I*), and one owned by the Aijitsu Collection in Ōsaka (=*A*). *A* is famous for having been granted to Yamagata Shigeyoshi, a merchant under Sendai Clan patronage in Ōsaka, but it has been little studied, and it has been of particular interest for the purposes of this paper.

Briefly expressed, the major features of the three manuscripts are as follows;

A: officially copied from the original, given to Shigeyoshi by the Lord of Sendai in 1808, i.e., only one year after Gentaku had presented that original to the Clan. The text-lettering is in the official-copyist style, and the text contains a few lacunae, including words regarding sexual relations and illustrations related to Christianity, which were intentionally omitted by the copyists.

D: evaluated as being next-best to the original, with many fine illustrations. While the text contains, unfortunately, many worm-eaten parts, it has no lacunae and has only rarely undergone any revision.

I: recopied from a manuscript that had been copied from Gentaku's duplicate of the original. That manuscript had been produced by Ōtsuki Bankei, Gentaku's son, who presented it to Itō Genboku, a famous *rangakusha*, to express Bankei's gratitude for financial help. The text of *I* is, generally speaking, similar to that of *A*, and from this we may imagine that it provides a reasonably accurate reflection of the original compiled by Gentaku.

Among the *A*, *D*, and *I* texts, there are no passages or individual words which reflect different meanings, and it would seem safe to assume that we can currently obtain the best *Kankai-ibun* text by emending on the basis of a comparison of *A* with *D*.

《個人研究第2種》

大槻玄沢・志村弘強編『環海異聞』本文確定の基礎的研究

岩井憲幸

一　はじめに　本稿は、文化四年（一八〇七）成立の『環海異聞』が比較的多数(注1)今日迄伝存してはいるものの、いわば原本というべき書が現存不明であり、従って最良の本文翻刻(注2)がなされていないという現状に対し、最良の本文を確定する為の第一段階を模索した報告である。ここでは、従来あまり知られていなかった愛日文庫所蔵本につき詳しく述べ、この書を中心にすえ、さらに善本と目される宮城県図書館所蔵旧伊達家本・一関市博物館所蔵本(注3)との比較を通じて、愛日文庫本が『環海異聞』の本文確定にとり必須の書であることを示す。紙幅が限られているゆえ、『環海異聞』の成立事情等々は諸家の研究(注4)に任せ、かつ既知のものとして不問に付し、即課題に入る。以下では上記三本をそれぞれ愛日本（略号A）・旧伊達家本（D）・一関本（I）と適宜略称する。

二　愛日本の書誌　大阪の市立開平小学校に存する愛日教育会所蔵の『環海異聞』（A）については海野一隆氏による〈資料紹介〉がある(注5)が、従来あまり知られていなかった故、重複を厭わずやや詳しく記す。

(1)通番号：130(1)～(16)、木崎番号288(注6)

(2)著者：大槻茂質・志村弘強編(注7)

(3)冊数等：美濃判十六冊、即ち〈序例附言〉の首巻一冊、〈巻之一〉～〈巻之十五〉迄十五冊。

(4)成立：文化四年（一八〇七）序

(5)刊・写、装幀：写、和装本、四針眼、袋綴

(6)書名等：内題に〈環海異聞巻之一〉のようにある。

(7)本文体裁：毎半葉八行取り、注双行。插図多数（別表参照）

(8)各巻紙数：別表参照。なお丁付けなし。

(9)印顆：『愛日文庫目録』によれば〈思貽堂圖書記〉(注8)

(10)箱書等：二重の木箱に保存。外箱蓋オに中央より左へ〈環海異聞　全十六巻／維文化五年歳次戊辰／季冬従／仙臺君拝領／重芳謹記〉、内箱蓋オ中央に〈環海異聞　十六冊〉、内箱内押さえ板オには書名を中央に配し、右より〈文化五年歳次戊辰季冬従／仙臺君拝領／環海異聞　全十六巻／思貽堂重芳謹記〉と、それぞれ墨書が存する。

いくつかの項目につき補う。(3)の〈美濃判〉だが、実際は第一冊目〈序例附言〉において二六・七×一九・三センチ前後。(4)成立は〈序例附言〉三六オに〈文化四年丁卯初夏　醫臣大槻茂質謹識〉とある。(6)

についてはやや説明を要する。各冊は拝領直後に施されたと推量される保護表紙に厳重に包まれ、かつ題簽も貼られているが書名を欠く。原装の表紙は紺地で、書き題簽を有するものと思われるが、確認できず。全冊に施されている保護表紙は、書冊全体をくるみ込み、かつ要所要所糊づけされている。この保護表紙は上端に龍をあしらった紋様が薄青で刷られおり、右端に貼られた題簽紙にも双龍で枠をなす紋様が薄赤で刷られものを用いる。題簽にはすべて書名が大書されておらず、右下隅に〈序例附言〉〈一〉…の如く小書きがある。これが筆によるかペンによるか不明。さらに保護表紙左下隅にペン（鵞ペンか）により〈mok. 1〉(注9)〈1〉…〈Eind. 15〉の文字が直書きされている。〈1〉の字形は大文字の〈J〉を用いる。蘭学者流である。保護表紙の仕立てとペン書きは山片重芳によるものであろう。なお、保護表紙右端には後代の図書ラベルが全冊に貼付される。⑽の箱書だが、内箱蓋オを除き、他は山片重芳による直書きとみられる。〈文化五年…冬〉は重要な年紀の記述で、⑷の補記中の〈文化四年…初夏〉脱稿時から早くも一年半程後に山片は拝領したことになる。蛇足だが、重芳は大坂の豪商山片家の四代目当主であり、山片蟠桃はその番頭職にあった。重芳は好学でも知られ、蟠桃は『夢の代』の著述をもつ学者でもあった。同家は二代重賢の時、仙台藩の蔵元となり、四代重芳にあっては殊に仙台藩との格別な結び付きを有していたようで、商売上のみならず、種々の海外情報をも得ていた様子が現存資料からうかがえるのである。

三　愛日本の本文と丁数　愛日本の各巻は、それぞれ一冊仕立てになっていることは上述したが、その本文の構成はどうであろうか。第一冊〈序例附言〉の巻首には次のようにある。

環海異聞　序列附言

同36オにはこうある。（丁数は私に算えた）。

文化四年丁卯初夏　醫臣大槻茂質謹識

さらに巻尾42ウには次のようにある。

総計拾五巻（巻首序例目録實巻共拾六巻図一百十五／従實政五年癸丑迄文化三年乙丑拾三ヶ年となる也）

後二者の記述から本書の成立と編者が知られるのだが、編者については大槻のみで、序例本文中に志村の名が記されている点は注意すべきである。拙稿では草稿本を重視し、大槻の単著とはみず両人の著作とみる。

37オ以下には〈目次〉と題する記述が続く。全体の内容を知るに簡便であり、かつ後述の挿図の数も記すので以下全体を引用する。

目次

巻之一

寛政五年癸丑石巻出帆後難風に逢ひ」数ヶ月漂流し甲寅六月オンデレイツケといふ嶌に漂着しナーツカといふ湊に」壱ヶ年に向（ナンヘ）んとして滞留せし記　三図　」（37オ）

巻之二

ナーツカ滞留中の記并に魯西亜舩の」護送を得て乙卯四月此湊を發し」其本領の内地オホーツカといふ湊に」着岸し数日逗留其八月より翌丙辰」の年迄拾五人之者共追〻三ヶ度に」オホーツカ出立ヤコーツカといふ處に」到るまての道中記　拾五圖　」（37ウ）

巻之三

ヤコーツカ江着暫く滞留夫よりイルコーツカ」迄被送届惣人数追〻丙寅十二月」同所に相會せし迄の道中記并に」此所に数

年足を止る事になりたる記」

八ヶ年滞留中紀事分類

街衢居室　弟一　七図

巻之四

飲食　弟二　」（38オ）

服飾　弟三　卅図

巻之五

寺觀道教　弟四

産育及赤子命名　弟五　六図

婚　弟六

巻之六

葬　弟七

祭　弟八　」（38ウ）

衙廳並官名職掌政治兵卒武備」　弟九

刑獄　弟十

銭貨　銭鈔　弟十一　三図

巻之七

尺度并里程　弟十二

秤量　弟十三

楽器　弟十四　五図

氣令　弟十五　」（39オ）

耕農　弟十六

交易　弟十七

醫療　弟十八　三図

物産　弟十九

數量　弟二十

土俗風習　弟廿一

巻之八　」（39ウ）

言辭　弟廿二

天文　地理（諸國地名本國通称）　時令

人倫　身體　居室

動物　器財　衣服織段

飲食　言辭　二図

各門譯語並ニ名物ノ解其下ニ譯セリ

巻之九

癸亥の年三月王命下りて拾三人の者」（40オ）イルコーツカ出立七千里の道中へ首途し」舊都ムスクワを經て新都府ペトルブルカ江」到れる道中の記并旅舘滞留中の記」これ享和三年也

巻之十

國王江目見以来の次才并に都下巡覧」の記　六図

巻之十一　」（40ウ）

都府滞留中の記二

此所にて六月儀平等四人の者日本」使節舩同伴帰朝すへき旨申渡され」出立してカナスダといふ港より大舩に乗」組迄の記　九図

巻之十二

六月十六日カナスダ出帆第那馬尓加（デヲマルカ）と」諳厄利亜（イングリア）江舟を泊め加那里亜（カナリア）嶋江舩を」（41オ）寄せ夫より赤道直下の海上を經過し」南亜墨利加（アメリカ）洲伯西（ブラシリー）児の内エカテリイナ」湊江着岸の海路及同所滞留出帆して」其大洲の岬を乗廻し西海に向ひし」迄の記　三圖

巻之十三

甲子（文化元年）四月下旬マルケイサといふ裸（ハタカ）」嶌江舟を繫（カ）け此所を發し

て再ひ」（41ウ）赤道直下を西に距りサイペイツケ嶌を歴（へ）夫より北亜墨利加（アメリカ）洲を右にして亜細亜（アシア）」洲なる魯西亜領分の盡境（ハテ）カミシヤーツカ」といふ湊江七月初旬着岸の海路并に」同所数日逗留用意整ひ八月五日出帆」蝦夷地より日本の東南にあたる大洋を」渡海し薩摩海江向ひ九月初旬肥前」長崎江入津迄の記　五圖　」（42オ）

巻之十四

長崎港入船上陸後の次弟並乙丑（文化二年）」三月御奉行所御請取迄之記

巻之十五

往来滞留前後の間の雑事

以上〈目次〉の末に上に引いた巻尾（42ウ）の引用文が総括として記されている。ここで図を〈一百十五〉としていることに注意されたい。

次に各冊の丁数であるが、次表のようである。ここでは墨付が半丁の場合も一丁と算した。表中の丁数は比較の便を考えアラビア数字を用いる。単純に加算すれば全十六冊で全五六〇丁となる。又、最終巻がもっとも厚いことが容易にみてとれよう。

巻	A丁数	D丁数	I丁数	備考
序例附言	42	42	42	
巻之一	34	34	34	
巻之二	33	33	33	
巻之三	33	33	33	
巻之四	34	34	34	
巻之五	34	34	34	
巻之六	36	36	36	
巻之七	34	34	34	
巻之八	30	30	30	
巻之九	36	36	36	
巻之十	32	32	31	*
巻之十一	34	34	34	
巻之十二	33	33	33	
巻之十三	31	31	31	
巻之十四	36	36	36	
巻之十五	68	68	70	*

注　＊巻之十においてIが〈31〉であるのは、A・Dが32オに〈環海異聞巻之十終〉と記すのに対し、Iはこれを欠き、白紙が続くゆえ、算えなかったためである。＊巻之十五の〈70〉は、上述の跋・後書き2葉分を算えたからである。実の処、三本共に本文は各半葉末の文字がすべて一致する。

四　愛日本の插図　『環海異聞』は本文中に説明の為に插入された図の豊富なことでも知られる。後述するような理由でも重要ゆえ、次に煩を厭わず一覧を掲出する。概して、図は見開き一丁、半丁、本文中の小図の別を有するが、タイトルを有する場合はこれを引用し、無い場合は「　」を付して筆者の命名による題名を掲げる。（欠）を不在を示す。なお、ここには地図・文字表等も含めるものとする。題名中〈…〉は省略である。又、下方の欄は後に問題とするものであるが、愛日本（A）に掲載する図が旧伊達家本（D）・一関本（I）にも存在するか否かを比較する項である。存在は○、存在するが重要点で異なりを示す場合は△、存在しないは×で表示する。備考欄には注のあることを＊で示すが、写本間で多数の差違が認められるものの、最小限の言及に留める。

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
1	序例附言	4ウ～5ウ	魯西亜使節舩本朝江渡海せし舩路於長崎書キ上ケしといふ図	△	○	*
2		32ウ	魯西亜國字	○	○	
3		33オ	又一體	○	○	
4	巻之一	28オ	オンデレイツケ島穴居并嶋人其土室江出入之図	○	○	
5		28ウ～29オ	コージキ圖	○	○	
6		30ウ8	[楫の図]	○	○	
7		34ウ	オクチヨ鳥之圖	○	○	
8	巻之二	4オ	島人男女並少女之圖	○	○	
9		4ウ	額上頭(ヒタイノウヘカシラノアタリ)圍にはめる冠(カブ)り物の圖	○	○	
10		5ウ	嶋の婦人[の鼻・耳飾り]全図／衣服の縫目[に飾るオクチヨの觜]図／紡錘(ツム)之図	○	○	
11		5ウ～6オ	セイウチ圖	○	○	
12		6ウ～7オ	嶋人…皮舩に乗り…猟をなす図	○	○	
13		7ウ	皮舩全図	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
14		8オ	稌(モリ)全図／稌(モリ)を使ふ手法の圖／頭迄冠(カブ)る皮衣全圖	○	○	
15		8ウ～9オ	ナアツカ魯西亜人居處圖	○	○	
16		9ウ	[墓標の図]（欠）	○	△	*
17		16ウ～17オ	氷山圖	○	○	
18		20ウ	オホーツカ家屋図	○	○	
19		21ウ～22オ	犬に荷を積たる雪車(ソリ)を為レ牽図	○	○	
20		26ウ	旅行用意せし人の図	○	○	
21		27オ	ゼリワチカ図／荷を固(コホ)り結ひめをわなにしたる圖／馬に荷を駄したる図	○	○	
22		32オ	アウタンより以西人家土室図	○	○	
23	巻之三	4ウ～5オ	人の乗たる雪車(ソリ)を四疋の馬にて河氷の上を牽する図	○	○	
24		9オ	セイチカ圖	○	○	
25		27オ	ベイチの下地	○	○	
26		27ウ	ベイチ全図	○	○	
27		28オ	椅子図	○	○	
28		29オ5	[厠の穴の図]	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
29		32オ	浴室圖	○	○	
30		32ウ～33オ	浴者の登る店の図／小桶	○	○	
			桜の葉付の枝箒の圖／焼石に水を…圖			
31	巻之四	13ウ	牛肉等入れて灶に入れ煮る瓶の圖／瓶をのせて竈の内へ出し入れする鉄器の図	○	○	
32		14オ	食盤三ッ道具図	○	○	
33		21オ	カリトース	○	○	*
34		21ウ	カリパーカ	○	○	
35		22オ	ヲリパーシカ	○	○	*
36		22ウ	[同] 背面	○	○	
37		23オ	カミゾー	○	○	*
38		23ウ	[同] 背面	○	○	
39		24ウ	フハイカ／[その紋様の図]	○	△	*
40		24ウ	[同] 背	○	○	
41		25オ	ガミゾ	○	○	
42		25ウ	[同] 背	○	○	
43		26オ	ヲリバシカ	○	○	
44		26ウ	[同] 背	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
45		27オ	シタノイ	△	○	*
46		27ウ	[同] 背	○	○	
47		28オ	シタノイ／ビラスケ]ニツ	○	○	*
48		28ウ	[同] 背	○	○	
49		29オ	シ子リ	○	△	*
50		29ウ	[同] 背	△	○	*
51		30オ	シタノイ	△	○	*
52		30ウ	[同] 背	○	○	
53		31オ	シ子リ	○	○	
54		31ウ	[同] 背	○	○	
55		32オ	シタノイ	△	○	*
56		32ウ	[同] 背	○	○	
57		33オ	チヨロケ／シャーカ	○	○	
58		33ウ	ポロケンツサ	○	○	
59		34オ	ラチセアラ	○	○	
60	巻之五	6オ	鐘楼圖	○	○	
61		6ウ	鐘楼の内にて数〳〵の鐘を手足にて拍子よくふりならす図	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
62		9オ	大寺表面図	○	○	*
63		9ウ～10オ	同堂内圖	○	○	*
64		13ウ	アリヘレイ大和尚帝より賜る冠帽図	○	○	
65		14ウ	轉車の斗（マス）に人を乗せて旋轉する戯の図	○	○	
66	巻之六	10ウ～11オ	［衛兵立番の図］	○	○	
67		15オ	龍吐水に皮袋をつけたる火消道具／木造りの家横木を引かけ取崩す道具	○	○	
68		31ウ7	［銀貨中の十字］	○	○	
69		33オ1	金銭［の大きさを示す円形］	○	○	
70		35オ	當十銭／ゼニシカ／スヱレブロ	○	○	
71	巻之七	1ウ4	［曲りかねの図］（欠）	○	×	*
72		6オ	［法馬の図］	○	○	
73		7ウ	ゴーシケ	○	○	
74		8オ	ドウチカ／ケレプコ	○	○	
75		8ウ	パライカ	○	○	
76		16オ	ソーボリ貂（ヒヤウ）圖	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
77	巻之八	18ウ	ハナレ［二種の図］	○	○	
78		20オ	十露盤	○	○	
79	巻之九	10ウ～11オ	車馬図	○	○	
80		13ウ～14オ	風扇（カサクルマ）之図	○	○	
81		15ウ2	［韃而靼人の帽子の形の図］	○	○	
82	巻之十	10ウ～11オ	魯西亜當國帝夫婦肖像	○	△	*
83		13オ	シャリ図	○	○	
84		14ウ～15オ	風舩飛走圖	○	○	
85		30ウ～31オ	天地大球の図	○	○	
86		31ウ	［天象を示せるもの］	○	○	
87	巻之十一	3ウ	街衢圖	○	○	
88		5ウ～6オ	［鉢植物の室の図］	○	○	
89		6ウ	［鉢植三種の図］	○	○	
90		7ウ～8オ	［異木の］圖	○	○	
91		9ウ	蘭書所載ウヲ根ルテルボーム樹図	○	○	
92		13ウ～14オ	市中大戯場圖	○	○	
93		19オ	［ペトル　バイトロ　バウロ　イチ王像］	○	○	
94		25ウ～26オ	［食盤上の小人の図］	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
95		29ウ～30オ	加那斯達(カナスダ)湊築出しの図	○	○	
96	巻之十二	23オ	［バナナの図］	○	○	
97		24ウ	［亀に似たる魚の図］	○	○	
98		27オ	ガルカルゼル図	○	○	
99	巻之十三	3オ4	［鉄箍の断ち切れの大きさの図］	○	○	
100		7オ	鯨器(イレヌミトウク)図	○	○	
101		7ウ	島人男女圖	○	○	
102		8ウ～9オ	マルケイサ嶋舩図	○	○	
103		13ウ	サンペイツケ嶋人男女図	○	○	
104		19ウ～20オ	バウラツケガワ湊圖	○	○	
105	巻之十四	12ウ	［オロシア船頭部屋平面図］	○	○	
106		13ウ～14オ	長崎湊口図	○	○	
107		14ウ	魯西亜國舩印小旗図	○	○	
108		14ウ後3	［宝器の図］	○	○	
109		14ウ後2	［笏の図］	○	○	
110		15ウ～16ウ	魯西亜舩入津図	○	○	
111		17ウ	魯西亜人客舘図	○	○	
112		24オ	ニコラ　レサノツト	○	○	*

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
113		24ウ	上案針役ラートマノフ	○	○	
114		25オ	歩卒(サウダ)(アシカル)	○	○	
115		25ウ	同背面	○	○	
116		26オ	冠帽［八種］	○	○	
117		26ウ	オ、ストロ	○	○	
118	巻之十五	7ウ	［オロシイア本領惣國全図よりの写し］	○	○	
119		8ウ～9オ	抜乙(バイカル)蛤鹿湖漁猟圖	○	○	
120		11ウ7	［箭の鏃の図］	○	○	
121		42ウ～43オ	新造軍舩圖	○	○	
122		45ウ～46オ	［水車による製材所の図］	○	○	
123		67オ4	［光太夫のいう斗の図］	○	○	

注（*の下は通し番号を示す）

*1. A・Iは〈赤道〉の文字のみ示され、それを示す実線が描かれず。Dはともにあり。 *16. A・Iは説明の文字のみにて、描線なし。Dともにあり。 *33～59. 総題として20ウ末に〈漂客帯来冠帽衣服諸圖　共廿八〉とある。 *35. D題名中〈ハ〉に濁点と半濁点が重なる。 *37. D・I〈ガミゾー〉。 *39. I折返しあり。(注10) A・Dなし。 *45. D折返しあり。A・Iなし。 *47. A・D・I折返しあり。 *49. I折返しあり。A・Dなし。 *50. D折返しあり。A・Iなし。かつAは肩掛けなしで描かれる。Aに不審紙あり。 *51. D折返しあり。A・Iなし。 *55. D折返しあり。A・Iなし。 *62・63. 総題として8ウ1に〈寺院之圖〉とあり。 *71. A図なく、

重芳の貼紙〈此圖落乎〉あり。I〈図欠〉と小書きする。＊82. I 2図ともに背景描かれず。＊112～116. 総題として23ウに〈使節レサノツト等之像／并 冠帽諸図〉とある。

図の数は〈序例附言〉で〈一百十五〉とするが、表に示したように小さな図を含めるとこの数を上まわる。又、愛日本と他本の間に、問題にしなければならない点がいくつか存在する（後述）。

五　洋字の問題　本文中、ロシア文字やラテン文字の洋字が行中に書かれる場合、少なくとも愛日本にあっては写し手は原則的に別の人物であったように看取される。恐らくは多少洋文字に通じている人物が任に当たる要があったのだろう。このようなケースを掲げてみると次表のようになる。（ルビは問題のある箇所のみ表示、他は省略して引用）。

通し番号	巻丁行	A	D	I	備考
1	序列附言33ウ8	АГДЕІКЛМПРТФ	АГДЕІКЛМОПРТФ	（Dに同）	＊
2	34オ1	[ЯЖЧΘの筆記体]	（Aに同）	（Aに同）	＊
3	〃　4・5	[Ψの筆記体と]Ψ	（Aに同）	（Aに同）	＊
4	巻之十一32オ7	（欠）	КРОНІІNТатЬ	（欠）	＊
5	巻之十二32ウ8	m（エム）	M（エム）	（エム）	＊
6	33オ1	m（マイ）	MAN（マイ）	□（マイ）（虫損）	＊
7	巻之十五17ウ2	Thobayleÿ london 26864,	Thobaÿleÿ london 26864.	Thobaÿleÿ london 26864.	
8	22オ3	ГОЛААНД.	ГОЛААНД.	ГОЛЛАНД.	
9	22オ4	НОВ. ГОЛЛАНДІЯ.	НОВ. ГОЛЛАНДІЯ.	НОВ ГОЛЛЛИНДІЯ.	
10	〃　5／6	（欠）	Г.	（欠）	
11	〃　7	（欠）	С.	（欠）	

注　＊1・2・3・5　原文縦書き。＊2　第1字存疑。＊4　Aはルビとして〈コロンシタト〉とあり、本文空白。その箇所に重芳による〈此處蠻字可有乎〉の貼紙あり。D〈コロンシタト〉のルビと右表のロシア文字あり。Iルビのみ。＊6　A原文縦書き。

六　旧伊達家本と一関本　現在宮城県図書館に蔵される旧伊達家本は、前述のごとく県の指定文化財に登録されているが、元は伊達伯爵家観瀾閣に蔵されていた。玄沢によって藩に提出された原本の存否を確認できぬ今、この書は玄沢上呈本に次ぐ書とみなされている。一方、一関本は、近時の購入というが、大槻磐渓が家蔵の玄沢自筆本を写して伊東玄朴に贈ったものと考えられている。

一般的にみて、玄沢自筆本は完成時に藩に提出され、後、写し方と称される専門家により通常正・副一揃いづつが浄書献上されると考える。（『官途要録』(注11) 第二冊によれば、玄沢の提出は文化四年五月九日だったようである。）この流れにおいて、愛日本・旧伊達家本はどの位置にあり、又一関本にいう大槻家の家蔵玄沢自筆本と、文化四年、藩に提出した玄沢自筆本とは同一か否か、の検討が必要となる。本文確定の為には不可欠な作業であろう。なお筆者が一関本に関心を寄せたのは、洋学者が洋学者に対して写本を行なう場合、どのような態度が筆写に反映されるかを知りたかったゆえである。愛日本は全体的印象を一言でいえば、上品な精写浄書本であろう。旧伊達家本と比較するとそのことがより明白となる。しかし両者は本文に関してどうであろうか。

これらの点を検討する前に旧伊達家本と一関本につき、書誌を略記せねばならない。前者については濱田直嗣氏の報告書(注12) より摘記する。（原文横書き。今、縦書きに変更して引用）

『環海異聞　15巻・首1巻』　大槻玄沢、志村弘強編著　筆写本16冊（3帙）　伊達伯観瀾閣図書印　宮城県図書館伊達文庫印
挿図・彩色画（一部墨画）　原本は文化4年（1807）夏脱稿　同年秋伊達家へ献上（現存の伝存は不明）［中略］(注13) 美濃判　和装本　袋綴　各27.2×18.9cm　巻首序例目録一巻　共16巻　115図

上掲引用文の次に各巻の内容が示され、さらに〈特記事項〉中に次の一文をみる。

図様に関しては巻十、巻十四の描写は特に精密で、出来の良い巻とされる［中略］。なお、各巻の内容に準じて行数・文字数などの様式は異なるが、書体、図様はほぼ同種と見られ、各一人、多くとも二人による筆写と考えられる。

「環海異聞」の善本は、内閣文庫本（文政12年書写・小柴直裕）、早稲田大学大槻文庫本、大阪愛日文庫本、京都大学本、一関博物館本が知られるが、和綴じ本、十六冊、彩色挿絵の、体裁もほぼ同じな当宮城県図書館本はこれらと比較しても、遜色のない内容を持つものであり、貴重な存在といえる。大槻玄沢らが脱稿して間もない文化3年秋、仙台藩に献上したといわれる遺品の現存確認ができない現状にあって、伊達伯爵観瀾閣図書に属していた当本は、献上本に次ぐ位置にあると考えることができる。更に、宮城県内に現存する「環海異聞」としては、最上位の内容と体裁を保つものである。（以下略）

補記するが全十六冊中五冊を除き、他は和紙一枚を前後の保護表紙として施す。元来全冊がそうであったろう。これに直書きで書名を墨書する。元表紙は明るい茶色で、左に金を散らした短冊を題簽とし、書名を墨書。観瀾閣の印顆は各巻首右に認められる。残念ながら虫損が多数かつ随所にみられる。挿図はきわめて細密で、淡彩をほどこし上品である。なお各冊本文前に遊び紙一葉を施す。さらになお、巻之一に綴じ違いがある（後代のものか）。

一関本は、平成十九年特別展カタログ(注14) に依ると、次のようにある。

環海異聞　大槻玄沢撰　紙本墨書　手彩図　16冊　縦26.8　横18.4　文化4年（1807）成稿　［解説上略］この写本は、磐渓が家蔵の玄沢自筆本を写して伊東玄朴に贈ったものである。

カタログ十四ページには本書がカラーで掲載され、十六冊揃い全体とロシア皇帝皇后肖像の見開き、観覧車の図の計二点が示されている。

ここでも補記する。近時購入したとのことで、すべて本文は洗浄後裏付ちされている。よって上下やや切断される。すなわち補修済み。かつ巻之八末付近に再製本時の綴じ違いあり。各冊とも表紙は明るい紺。書き題簽にて元来のものであろう。各冊巻首のど下に〈本姓佐野〉角田來□〉の印顆を有する。（末字不読）。全体を通して行草体多く、末に従い草書的な字体が増加する。全体からみて善本といえよう。ただこの一関本の最大の特徴は、写本の成立事情をあかす次のような跋文等を有することである。第一に巻十六末オに五行に亘り次のように

ある。

右此環海異聞一部十六巻伊藤氏（東）」所蔵也不佞有故為佐野氏手寫焉」
年将晩繁事之際故○書或至五十」紙因墨痕不勝見汗顔々〻」鬧窓
外史

同ウに十行、さらに次葉オに五行が存する。前記引用文とは一見手が異なる。

近日余貧甚冲齋伊東君為出數十金盡償負」債而不問返完之期
義氣曠懐今世安得此人哉」銘心之餘自述五絶句以申謝悃時中
元前二日也
感泣滂々欲濕巾救窮恩不減君親錐刀争利滔々」是曠達如君有幾
人」
滿街燈火近蘭盆奔走依稀歳事紛討鬼今宵容易」散不須更造送窮
文」
半生歳路太崢嶸今日縁君特地平一片猶餘豪氣」在山河萬里可横
行」（ウ）
也無剥啄到柴門一枕清風午夢閑自咲先生窮未了留将文債重於山」
炎威漸退葛衣清秋動庭梧葉上聲只合深宵貪誦」讀十年燈火報君
情蓋此詩在寧静閣文中」
辱愛　盤渓　大槻崇拝草」（オ）

さらにウに次の十行がある。

大槻茂質（元琢）之環海異聞冲齋伊東氏之所藏也其書」則茂質之手書其繪
則男大槻磐」渓之所圖矣往磐」渓有世路之急愬諸伊東氏伊東氏即
為出數十金」以救之以故至今磐渓之得全業者頼獨伊東氏之」恩矣
後磐渓返金而不受因贈致此書一部請謝恩」義冲齋容之今藏伊東氏
此之故也予與冲齋有故」獲聞傳来之由并借其謄寫之也因又記記
由」於尾亦録磐渓當時之詩以實其事而已矣」
安政乙卯年春正月　櫻岳居士書」（ウ）

さてこの三つの文章をどう解するべきか。配置の順、筆跡の二点から次のように考える。

（一）第一の跋文と第二・第三の後書との二群に分けるが、すべて同筆とみる。第一の跋文は写し手本人の手が前面に出たケースと考える。（二）第一の跋文は伊東氏所蔵本の写し手（鬧窓外史）が時間に追われて佐野氏の為に書写したことを言う。従って現一関本は伊東氏所蔵本の写しである。（三）第二・第三の後書中、第二の詩文は第三の後書のいわば証拠である。第三の後書は重要で、大槻家家蔵本（注15）は玄沢の手書、その息・磐渓の図からなる。この家蔵本から、おそらく磐渓が、伊東氏に一写本十六冊を製したと、筆者は考える。これが伊東氏所蔵本であろう。さらに、伊東氏所蔵本の由来を櫻岳居士が聞いており、又後者もこれを借写した。その由を安政二年（一八五五）に誌した。この後書（第二・第三）は、伊東氏本に誌されてあったのではないか、そこ迄を跋文に出る写し手、鬧窓外史は書写したのではないのであろうか。別の考え方も存在するだろうが、ここではかく推量しておく。いずれにせよ、一関本は伊東本そのものではなく、伊東本の写本と見るべきであろう。しかし大槻家家蔵本の面影をとどめて

いる点で重要な写本である。

七　本文の異同　さて、もっとも肝要である本文だが、そこにはどのような問題が潜んでいるのだろうか。すなわち具体的な異同はどうであろうか。ここでは巻之八につき、例示する。(注16) 愛日本を基準とし、旧伊達家本（D）、一関本（I）と対比すると本節末の別表のようになる。

本文確定上、もっとも問題となるのは(a)欠文あるいは項目の欠落であろう。通し番号49の愛日本における欠落は、献上本原本から公式に書写された際、意図的になされたとみられる。逆に、愛日本が〈仙臺君〉が見たであろう本に極めて近い写本であることを証するともとれる。一方、71の場合はDにのみ存し、愛日本・Iに欠落している理由はわからない。語彙集の最后の位置にあること、部門分けにこの項目があわないこと、直前のグループが日本語にロシア語の順で立項するのに対し、その逆の立項である点からみて、後に巻之七の本文中から拾いあげて加筆されたものであろう。（なお内閣本（函架番号二七一・七）にあるが、早大大槻本にはない）。大槻の原本には本来存在しなかった可能性がある。

上記(a)ほど重要性がないものとして、(b)主要部分以外の脱落、これに含められるかも知れない(c)ルビの脱落があり、これらには恣意性が感じられる。さらに単純なものとして(d)軽微な変更、(e)スペースの誤認がある。これらの例を通し番号で示せば次の通りである。

(b) 1・2・42・43・47・49・52・63・64　(c) 8・22　(d) 38
(e) 59・62

次に問題となるのは、数量の点で多くみられるところの(f)半濁点・濁点の混同、および(g)清・濁音表記の異なりである。これらは当時の日本語表記のルースさと、対象が未知の外国語であることに起因する不可避的現象といえよう。次のように多数にのぼる。

(f) 6・13・15・19・21・23・24・28・30・31・37・38・54・56・57・58・67・68・70　(g) 14・16・17・20・25・29・33・46・48・51・53・55・60・70

第三の問題は(h)字形の相似による混同・誤写であり、巻之八の場合、ロシア語表記に用いられる片仮名でのケースが目立つ。例　ロ／コ（通し番号4）、ス／フ（5）、コ／ク（9）、テ／ラ（11・22・41・61・65・66）、ツ／ワ（12）、ク／タ（13・44）、ナ／チ（18）、ラ／ウ（23）、テ／ケ（27）、ツ／フ（34）、ソ／ツ（36）、ウ／ワ（45・52）、ニ／ヒ（50）、テ／チ（69）、子／と（32）

これに準ずるものとして、(i)くずし字に起因する異なり（39・73）がある。さらに、最終的には同一と認めてよい漢字における(j)同字（10・22・72）あるいは一種の異体字（35）のケース、仮名における(k)片仮名・平仮名の変更（26・40）がある。以上、第二の問題以降、ロシア語を扱うという本書の性格上、注意を要するのは(f)(g)(h)である。

巻之八以外につき、若干本文にかかわる問題を取り上げておきたい。語句に関するものとして、〈序例附言〉35ウ4にでる〈張三李四〉を〈朝三暮四〉と誤まる写本が存するが(注17)、本文確定作業上論外と言わざるをえない。本書では方言に言及する条も多いが、ここでは方言と明記せず本文に紛れ込んでいる例を紹介したい。巻之九のうち馬車の車輪を説明する文中に次のようにある。（愛日本による。7オ）

前なる小輪ハ後輪の半分程あり此小輪に付きて上の方にづく出て有り其づく三ッ一ッだけは上へ向ふなりこれ故其車輪下タへ落着ク所ハ後の大輪と同等になる也扨づくの上ハ撞木形（シュモクナリ）のうで木ありて是を前なる馬の胸の前へ施す

又この続きの末の条にこうある。（9ウ）

又前の車輪を一ッにして小クしたるハ直行したる車右往か左往かに横にめぐらさんとする時づくの所の旋轉によりて自由をなす様に工夫したる物と見ゆ

上記引用文中に現われる「づく」の語は、大友喜作校訂本が採用する「ぢく」であろう。校訂注がなく詳細は不明だが、「軸」の訛り、すなわち方言形であると考える。石井研堂校訂本系の諸本は、ほとんど原形「づく」を採用している。池田晧現代語訳では「銑」をあて、これを参照したものかゴレグリャードのロシア語訳本(注18)は〈чугунная болванка〉の訳語を用いる。「銑」は普通、銑鉄を言うが、ここでは銑鉄製の部品を意味すると解したとみられ、ロシア語訳はまさにその意の語を用いている。しかしここでの「づく」＝「軸」は、小車輪と車体をつなぐ支柱の意であり、広義の「軸木」を言うと解される。(10ウ～11オ〈車馬図〉を参照せよ)。上記引用文は恐らく大槻による記述とみなせるが、初めに「づく」の語を発した者が漂流民か、大槻か。少なくとも後者は方言と了解した上での記述か、あるいは特殊なタームとして誤認した上での錯誤か。後世の校訂者もこれを尊重したのか、不明であるが、本稿では発音の訛りとみる。

今ひとつ言及すべきは、元来原本において書かれていなかった箇所が存在するという点である。その典型例は巻之九・29オ3〈一　ガラフの服飾ハ上へに無地何色羅紗の［…］〉。〈色〉字の上の文字が空白になっている。右に小さく別筆で〈何〉とあるのは、筆写後の校正者によるものであろう。だが、恐らく原本において空白になっていたものと推量され、失念かあるいは質問せずにあって後考を俟って一字あけておいたものとみられる。従って、本文確定作業の際、元来空格がある場合もあったことは念頭に入れておくべきものと考える。

巻之八対校表

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
1	1オ7	ナ	ナ	ナ	
2	〃8	ナ	ナ	ナ	
3	1ウ7中	オロニ	オコニ	オロニ	
4	〃8上	ザカタ子	ザカタヨ	ザカタ子	
5	3オ8下	オストロ	オフトロ	オストロ	D消しあとあり
6	3ウ1上	ボヤツヅア	ボヤツヅア	ボヤツヅア	

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
7	〃1下	エノスタンノ	エノフタ□ノ	エノスタンノ	D虫損
8	7オ8	果し	果(ハタ)し	果し	
9	8ウ6	蒙古(モンコ)	蒙古(モンク)	蒙古(モンコ)	
10	9オ1	弟(デ)[…]	第(デ)[…]	弟(デ)[…]	
11	13オ5上	オラツ	オテツ	オラツ	
12	〃	オゼイツ	オゼイワ	オセイワ	
13	14オ5上	ポロクスケ	ボロタスケ	ボロクスケ	D「ボ」の濁点「ゝ」
14	14ウ3上	サウタ	サウダ	サウダ	
15	〃7上	カベタン	カベタン	カベタン	
16	15オ3上	コーハ	ゴーハ	ゴーハ	
17	〃7上	ソーパ	ゾーパ	ソーパ	
18	〃8中	シベチ	シベナ	シベチ	
19	15ウ3上	ビヨースト	ピヨースト	ビヨースト	
20	16オ6下	サプロートー	ザプロートー	サプロートー	
21	〃7下	パニヤ	バニヤ	バニヤ	
22	〃8中	席(シキモノ)ポスライ	席(シキモノ)ポステイ	席(シキモノ)ポステイ	
23	16ウ7中	ペレツワ	ベレツワ	ペレツワ	
24	17オ1上	パロス	バロス	バロス	

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
25	〃中	檣(ホバシラ)	檣(ホバシラ)	檣(ホバシラ)	
26	17ウ2中双行左	[…]チカと	[…]チカト	[…]チカと	
27	17ウ3上	ゴーシテ	ゴーシケ	ゴーシケ	
28	〃6下	バラカ	バウカ	パラカ	
29	19オ3双行右	翮(ハクキ)	翮(ハクキ)	翮(ハクキ)	
30	〃4中	キリベイシ	キリペイシ	キリペイシ	
31	〃5中	ベイチ	ペイチ	ベイチ	
32	20ウ1	用に	用と	用に	
33	22オ3上	ワリイノアレハ	ワリイノアレバ	ワリイノアレバ	
34	〃5上	サツタラガ	サフタラガ	サフタラガ	
35	22ウ2中	禾	木	禾	
36	〃下	ソウェトーカ	ツウェトーカ	ソウェトーカ	
37	23オ5下	ゴルポーカ	ゴルボーカ	ゴルボーカ	
38	23ウ1中	子．ケレブコ	子．ケレプコ	子、ケレプコ	
39	23ウ5中双行右	前又	若又	前又	
40	〃双行左	ホロシヨイと	ホロシヨイト	ホロシヨイと	
41	23ウ8上	チヤラレ．	チヤテレ．	チヤテレ．	
42	24オ4下	ウィツソーカ(ウェ)	ウィツソーカ(ウェ)	ウェツソーカ	

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
43	〃6下	プピラマ	プピラマ	ピラマ	
44	〃8上	スクワル	スタワル	スタワル	
45	〃8下	子　ザボウイ	子　ザボワイ	子　ザボウイ	
46	24ウ4下	スワツハ	スワツバ	スワツハ	
47	〃5上双行右	将接	将レ接	将接	
48	〃	タイハ貸せ	ダイハ貸セ	タイハ貸セ	
49	〃左	（欠）	将ニ消魂セント一ブラル　ザシローシヤ　已ニ消ス　ザー	将ニ消魂一ラル　ザシローシヤ　已ニ消ス　ザーブ	
50	25オ5上	バラヒウ	バラニウ	パラヒウ	
51	〃6上	スポカル	スポガル	スポガル	
52	25ウ4上	・ドロウ	ドロワ	ドロウ	
53	〃8中	ルーヒー	ルービー	ルーヒー	
54	26オ1上	ポルノ	ボルノ	ポルノ	
55	〃2双行右	花面（イモカホ）	花面（イモガホ）	花面（イモカホ）	
56	〃3上	ゴノワボルノ	ゴノワボルノ	ゴノワボルノ	
57	〃4中	ポリノ	ボリノ	ボリノ	
58	〃7中	ポラゴタリヨ	ボラゴタリヨ	ポラゴタリヨ	
59	26ウ1上	モイポタレ	モイ　ポタレ	モイポタレ	
60	〃7双行右	崇（アガ）	崇（アガ）	崇（アガ）	

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
61	〃8上	ゴシラ	ゴシテ	ゴシテ	
62	27オ1下	チョワスタイ	チョワ　スタイ	チョワスタイ	
63	〃6上	ウイチ（ウィ）	ウイナ（ウィナ）	ウイナ	
64	27ウ2双行右	咄	咄ナ	咄	
65	〃4下	ラーゴーレ	テーゴーレ	テーゴーレ	
66	〃6	スモラレル	スモテレル	スモテレル	
67	〃8上	なせ	なゼ	なゼ	
68	〃8下	ポシトウ	ボシトウ	ポントウ	
69	28ウ2	ゼイライチ	ゼイライテ	ゼイライテ	
70	〃5下	ヒオロブノ	ヒオロブノ	ヒオロフノ	Iにおいて他本の27丁、28丁が逆に綴じこまれている。
71	29オ3	（欠）	ポマタ　髪に付る油也	（欠）	
72	30オ6	質聞	質問	質問	
73	30ウ6	覚へける	覚へ来る	覚へ来る	

八　三本の比較と各本の特徴　愛日本（A）・旧伊達家本（D）・一関本（I）につき、冊数・各冊の丁数、插図の有無と相違、洋字の問題、本文の異同等を検討してみたところ、それぞれ当該の表および注に示したような結果を得た。ここでは細部にわたる議論は割愛し、総合的な観点から三本を比較すると、次のような各本の特徴が浮上する。

愛日本（A）は『環海異聞』成立の翌年に〈仙臺君〉より下賜された本であり、さらにきわめて保存がよい。これらは特筆に値する。恐らく、大槻玄沢が藩に提出した原本から藩のしかるべき書写方の写しであり、従って字様がそれ風になっている。図も丁寧・細密に模写され、完備する。ただし、本文中や小図に若干の、時には意図的、時には不注意な欠落を有する。旧伊達家本（D）は、保存が良ければ、三本中最も重要な写本であろう。ただし玄沢提出時の原本にやや後の加

筆が認められる（注19）。諸家が指摘するように挿図は圧巻で、描線・彩色もみごとだが、ことに人物の目が活写されている点は魅力である。残念ながら全体に虫損が激しく、おうおうにして本文にかかるのが、大きな難点である。一関本（Ⅰ）は『環海異聞』の周辺事情の一斑を明らかにする。かつ又、本文・図等の諸点において、全体として愛日本に近い。恐らく玄沢呈上の原本の控えとも考えられ、そうであれば、間接的に愛日本の特徴を考慮する上での証左ともなる写本である。

九　まとめとして　前述したように、三本とも全冊において毎半数末の文字は一致する。この点からしても、玄沢が藩に提出した原本の体裁は、全冊美濃判にして、〈序列附言〉一巻、巻之一から同十五まで本文十五巻、各巻に一冊をあて、計十六冊で一揃いであったろう。毎半葉八行取り。挿図は公的に〈一百十五〉図（注20）。本文字様は誤読を恐れ割合平易な字体を選んだと思われる。さらに、未処理の箇所をごく少数含んでいたと思われる。

結論的には大局的にみて三本にあっては本文中、文意を大きく左右する異文は存しないといってよい。本文確定作業に際しては、愛日本と旧伊達家本が第一の資料となる。なお、例えば巻之十に存する〈魯西亜當國帝夫婦肖像〉の画質、換言すれば出来具合の良さは、本文の質の良さとは一線を画して扱うべき判定基準であろう。多数の写本間での比較検討にあっては、ひとつの有力な目安となることは否めないが、善本間においては慎重にとり扱うべきものであろう。

さらに、流布に関し一言述べたい。成立後間もなく堀田正敦に貸し出された（注21）『環海異聞』は、愛日本系のものなのか、旧伊達家本系のものなのか。いずれにせよ、伊達家・大槻家・堀田家に存した写本から、さらに筆写されて巷間に広がったと覚しく、概して二種に大別される写本が流布したであろう。

本稿では、『環海異聞』の本文確定に関し、愛日本が果すべき重要な役割につき、基礎的なデータを提供しえたと考える。よって現在にあっては、最良の本文を得るためには、愛日本を中心に据え、これと旧伊達家本を対校しつつ作業を進めることが肝要である。

注

1. 『図書総目録』によれば五十セット以上伝存。なお、中村喜和〈環海異聞の中の人情　北槎聞略と比較してみて〉（「なろうど」五八号、二〇〇九年四月）、亀井高孝〈足利学校本『環海異聞』について〉（『葦蘆葉の屑籠』、時事通信社、昭和四四年）を参照。さらに滝沢馬琴が『環海異聞』を読んでいたことについては、杉本つとむ『馬琴、滝沢瑣吉とその言語生活』（至文堂、平成一七年）を見よ。
2. 今日迄の本文翻刻本等主なものについては参考文献Aを見よ。なお注5海野論文中に主な翻刻につき要領を得た対照表あり。
3. 函架番号、前者KD299-カ1-16・1～16、後者カタログ（注14を見よ）番号168。
4. 参考文献Aで示した諸書の解説、ことに池田晧〈序文〉〈解題〉を見よ。又、石山洋〈『環海異聞』の成立をめぐって―大槻玄沢の海外事情研究の一駒〉（参考文献B2所収）、さらに羽仁五郎訳註『クルーゼンシュテルン日本紀行』上・下（駿南社、昭和六年）を見よ。
5. 海野一隆〈『環海異聞』の知られざる善本〉（『東洋地理学史研究日本篇』、清文堂、二〇〇五年）。初出は「日本古書通信」六〇巻一〇、一一号、一九九五年。
6. 木崎好尚『愛日文庫図書目録』（大正八年）での番号。
7. 大槻茂質（しげかた）（宝暦七（一七五七）―文政十二（一八二七））は、仙台藩医臣にして蘭学者。通称、玄沢、号、盤水ほか。志村弘強（ひろゆき）（明和八（一七六九）―弘化二（一八四五））は仙台藩儒臣。養賢堂副学頭兼藩主侍講。通称、篤治、号、蒙庵ほか。

8. 筆者未確認。末中哲夫・楚上衛『愛日文庫目録』（大阪市立愛日小学校愛日教育会、昭和六一年）による。
9. 原本横書き二段。〈mok.〉はオランダ語ではなく日本語の〈目次〉をローマ字風に綴ったものの省略か。〈End.〉はいうまでもなくオランダ語。
10. ここでは衣服の仕立てを示す為、必要部分を展開できるようにした仕掛け。
11. 杉本つとむ編『大槻玄沢集Ⅰ』（早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学編　第4巻、早稲田大学出版部、一九九四年）による。参照、吉田厚子〈大槻玄沢『環海異聞』と北方問題〉「日蘭学会会誌」第14巻第2号、一九九〇年三月。
12. 濱田直嗣〈環海異聞、奥州名所図会、仙台東照宮御祭礼図、仙台藩美術資料等について〉（「平成16年度宮城県図書館貴重資料専門調査報告書」、二〇〇七年。筆者注、書名のルビは省略）、又、次も参照せよ、内馬場みち子〈伊達文庫蔵『環海異聞』のものがたり―資料の価値再発見の取り組みについて―〉「叡知の杜」第6号、宮城県図書館　二〇〇九年。
13. この箇所に〈「図書総目録」宮城県図書館本では手島惟敏写とある。〉の記述があるが、誤認であろう。手島は宮内庁書陵部九冊本の写し手。
14. 「大槻玄沢生誕250年　GENTAKU ～近代科学の扉を開いた人」一関市博物館、平成十九年九月。
15. この大槻家家蔵本が、現在複数存する旧大槻本のどれにあたるのか、あるいは伝存しないのか、残念ながら未詳である。
16. 杉本つとむ他上掲書〈底本（内閣文庫本）〉と〈大槻本〉の比較〉以下も参照せよ。
17. 大友校訂本、宮崎編石井校訂本にみられる。なお池田晧〈序文〉参照。
18. 参考文献A8。
19. これが元来玄沢によるものか否かも不明。しかしおそらく成立後まもなくなされたであろう。
20. 『官途要録』によれば、松原右仲・山村才助。参照、岡村千曳〈忘れられた銅版画家松原右仲〉（『紅毛文化史話』創元社、昭和二八年）、鮎沢信太郎『山村才助』吉川弘文館、昭和三四年。後者に言及あり。
21. 吉田上場論文参照。

参考文献（＊注で掲げたものは再掲しない）

A
1. 石井研堂『校訂漂流奇談全集』博物館、明治三十三年
2. 大友喜作『環海異聞』（北門叢書第四冊）北光書房、昭和十九年
3. 宮崎栄一編『環海異聞』叢文社、昭和五十一年
4. 杉本つとむ他『環海異聞　本文と研究』八坂書房、一九八六年
5. 池田晧訳『環海異聞』（海外渡航記叢書2）雄松堂出版、一九八九年
6. 山下恒夫再編『石井研堂これくしょん　江戸漂流記總集』第六巻、日本評論社、一九九三年
7. В.Н. Горегляд, Канкай ибун (удивительные сведения об окружающих морях) ; Тетрадь восьмая, Словарь, АН СССР, Институт Азии, М., 1961
8. В.Н. Горегляд, Канкай ибун, «Удивительные сведения об окружающих [землю] морях» ; Японская руколись XIX в. из рукописного фонда СПб ИВР РАН, Институт Восточных рукописей РАН, СПб., 2009.

B
1. 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅳ・Ⅴ　早稲田大学出版部、昭和五十六年、五十七年
2. 洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』思文閣出版、一九九一年
3. 田保橋潔『増訂近代日本外国関係史』刀江書院、昭和十八年
4. 高野明『日本とロシア　両国交流の源流』紀伊国屋書店、一九七一年

C
1. 『通航一覧』第八　国書刊行会、大正二年
2. 大槻如電『新撰洋学年表』柏林社書店、昭和三十八年再版
3. 荒川秀俊『日本漂流漂着史料』気象研究所、昭和三十七年

〔謝辞〕 初めに愛日教育会の出崎俊雄、丸山悦治の両氏に感謝申し上げます。ことに丸山氏は献身的に愛日本全十六冊を撮影し、電子化して下さった。研究推進の為、全巻写真撮影を慫慂して下さった末中哲夫先生にも御礼申し上げます。又、次の諸機関において貴重書を熟覧し、多くの方々のご協力を得ました。

愛日文庫、宮城県図書館、一関市博物館、国立公文書館内閣文庫、早稲田大学図書館、相馬美貴子、イサベル・田中・ファン・ダーレン

なお、英文要旨はマーク・ピーターセン氏の校閲を得ました。以上記して、謝意を表します。